

もうひとつ冬になる前にやっておかねばならない重要なことに、鳥たちの餌台の設置があった。雪解けと同時に餌台は一旦片付けるといふルールを設けたので、この季節立て直さなければならぬ。だいたい一冬たつと支柱の木も土と接する部分が腐れてくるので、新しい太めの枝を探してきて取り替えなければならぬ。それにアカゲラなどのキツツキ用の脂身棒は冬中突かれ続け無残な状態になってしまうのだ。まあ、これもおもてなしの準備と思うと楽しい作業のひとつだ。

秋の深まりと同時に、景色も徐々に茶色のモノトーンに変わってくる。春も茶色のモノトーンの世界になるが、気分的にはずいぶん違う。春は、モノトーンの中にぼちぼちと緑の点が見え始め、あるときからぐぐぐと群落ごとに緑の塊を成してくる。一方、秋はそれまで青々としていた葉の色が茶色になり色が抜けていく。そして草花などは徐々に丈が低くなり。やがて黒い斑点が浮き上がりそして溶けるように姿を消して行く。生のベクトルと死のベクトルの違いがそこにはある。ただ、歳のせいか、徐々に弱くなる光のなか植物たちが土に還っていく時間は美しく心の落ち着くものがある。

茶色い色も薄れていきすつかりモノトーンの世界に変わる頃、空の雲の様子が変わってくる。心なしか薄くはかなげな刷毛で掃いたような雲になる。そうになると、はらはらと白い雪が舞い降りてくる。こちらでは、その前兆に「雪虫」と呼ばれる小さな虫が飛び始める。お尻に白い綿毛をつけた虫が空中を漂う姿は雪に例えるのに相応しい。そして不思議なことに雪虫を見てから数日経つと本当の雪が舞い始める。最初は、白いものが地上に降り立つと自然に消えていってしまい。雪が止んだあとは何もなかったかのようになる。それを何度か繰り返しているうちに気温も低くなり地上の雪が溶けなくなってくる。それが春まで続くと「根雪」と言われる。だから後になってみないとそれが根雪かどうかは判定できないのだが、北国では口々に「これは、もう、根雪だね。」と自然に言い合う。それは、ほとんど外れることはない。

雪が降り始めると除雪の準備をしなければならない。ここには市の除雪車が来ないのだ。ただ、ありがたいことに住民同士で除雪組合をつくと除雪費用の一部を補助をしていただけ。町内会のお仲間の農家のKさんが大型の除雪車を持っているのでその補助金で除雪をお願いしている。除雪していただけるのは基本的に道路で私たちの車を停めているところから玄関までは自分たちで除雪しなければならない。これはあたりまえのことなのだが、量がちよつと多い。原因は住宅プランの誤りにあり私のせいだ。私は建物敷地が南東隅に限られることがわかってからアプローチは敷地の北西隅からと決めていた。来客は北西隅に車を止めそこから木々や草花の間を縫うように踏み分け道のような通路を進むと視界が開け遠くに建物が見える。それが我が家だ。そんな妄想を最後まで持ち続けて建物ができてしまったので、駐車スペースから玄関には行くには建物の周りを半周しなければならない。その除雪面積は七十五㎡。

